

「草庵和歌集」伝本考（下）

稻田利徳

この拙稿は、本誌の第六十五号と第六十八号に公表した「草庵和歌集」伝本考（上）（中）の続稿である。（上）では、伝本研究の現状、伝本研究の目的と方法、伝本の書誌的概要を述べ、さらに伝本の系統分類を行なうとともに、諸本間の和歌の有無の観点から、各伝本の性格に言及した。

続いて（中）では、詞書の異同、配列の異同を整理し、その異同の生じた原因などに触れ、各伝本の特質の一端を記述した。

この論考では、以上の（上）（中）の結果を受継し、主として諸本間の歌本文の異同を吟味し、各系統の伝本の位置に触れ、一応のまとめとしたい。

八 歌本文の異同（そのI）

現存の三十数本の諸本相互の歌本文には、数百箇所の異文がある。これは、作者頓阿自身が推敲を重ねたことにもようが、そのこと以上に、「草庵集」が多数の享受者によつて、幾度も転写されていったことに起因するものだらう。ただ、異同箇所は多くても、上句や下句全体にわたる大幅な異文は少なく、せいぜい大きても一句（二句）にわたる程度である。これは、頓阿が生前に幾度か「草庵集」を書写する機会があつても、大幅な改作は行なわなかつたことを示唆している。伝本相互にある、この夥しい歌本文異同を表示し、逐一検討を加え

るのは、あまりに煩瑣であり、ことは校本作成にゆだねるべきものである。しかも、本稿の目的とする各伝本の系統分類と性格把握に際しては、むしろ、その主旨に即した異同箇所に着目する方が有効性を持つと思つ。

ここでは、一本のみにみられる独自異文は除外し、原則として一本以上にわたり、しかも伝本分類の基準とかかわる本文異同五十箇所ばかりを任意に選択し、それを本文系統付けや性格把握の梃子とする。

その際、異同本文は、

わかなつむ我ころも手に風さて空も雪まのみえぬ野へ哉（三三）

の傍点部分が、「萩のやけ原」と一句全体に異文のあるといつた、單純な誤写によって生じたとは思えない異同、あるいは、

露さむみ道のしは草うつろひてふるき都は衣うつなり（六二二）

の傍点部分が、「露さむき」「露ふかみ」「露ふかき」と微妙な相違だが、諸本によつて多岐に分れ、しかも伝統分類の基準にもかかわる異同、または、

あしふきのこやの軒はも朽ぬらんひまなくつゝ五月雨の比（三四〇）の傍点部分が、「ふる屋の軒も」とある異文のように（親本に「古屋の軒はも」とあつたのを「ふる屋の軒も」と読んだものだらう）、單純な誤讀によると思える異同でも、分類にかかるもの、といったものに着目して適宜選択した。なお、伝本のなかには、異本との校異を傍記しているものも多いが、異本の方の本文は採択せず、あくまでそ

の伝本の原本文によつた。

校舎の処理は、「私家集大成 中世三」の底本として使用した、書C本を基本にすえ、その本文を○とし、それと対立する本文を、×△□■などで示した。この調査結果を表示すると、次の第V表のようになる（次頁参照）。

補注1、空欄に斜線のあるものは、その歌本文が伝本に欠如していることを示す。

2、竜門本の「恋下」以下が空欄であるのは、本文校合作業が未完了なるこ

とを示す。

比較的大幅な異同箇所で、一字程度の相違などのとき、異文項目を特設せず、基本に照らして、ある系統本の方に所属させたところが若干ある。

この第V表に即しながら、これまでの、歌の出入り、詞書の異同、配

で妥當であるかどうか、その検討から始めたい。

第一類系統本の第一種本の六本は、いわゆる版本系のなかで、承応
版本に最も近いもの一二話について。二つを重ねて示すのである。

ても極めて妥当であり、ほとんど同文で、例外は二箇所しかない。例外の一つは、

⑩ ちりはつる花のわかれをしたふまにいやはかなくもくる、春哉（一四六）の旁点部分が、坂本系では「ハやよかなこも」であるのに、三原

九 ⑭ うつせみはむなし(き)からものこりけりき(え)あとなき朝かほの露(一三一)
け「いやはかなくも」となつてゐるといふ。「べ」と「だ」の変体仮名は非常に酷似するので、この異同はそれほど問題視する程のことはない。もう一箇所は、

の傍点部分が、都A本のみ「あさかほの花」となっているところ。
の歌は、贈從三位為子の喪に服している為定の許へ、頓阿が、

例えば、歌の出入りで豊本に近い、架A本をみるとくる。

⑤ 春のよ月のかつらに咲花も空にみてやなをかすむらん(音) (一〇八)

のようにイ本と校合してある箇所が多い。これは、版本系は「空にみえてや」だが、豊本は「雲とみてや」と第三類系統本と同表現になつていて。豊本の親本や祖本に、架A本のような異本との校異がある際、書写者が、より妥当な本文選択を行いながら書写したと推測すれば納得がゆく。おそらくかかる成立過程を経て定着したのが豊本であり、やはり本来は、版本系とみなしてよからう。

室町期の古写本である第四種本の静本は（秋下までの残欠本）、歌本文でも、やはり版本と同文のものが多い。例外として、⑨⑬⑯⑰が

例えば、

⑨ 花もはやちりぬる後はおしまれぬ物とや春のくれてゆくらん (一四一)
の傍点部分は、版本系で「くれて春の」となっているが、静本の本文は、第二類や第三類系統本と同じである。他の⑬⑯⑰も静本の独自異文ではなく、第二類や第三類系統本と同一である。この現象は、先の豊本のように、他の系統本との接触の結果生じた混態本文とみるべきではなく、静本の本来の本文であろう。その点、⑨⑬⑯⑰などは、版本系の祖本の本文を伝えている可能性が強い。

第五種本の古写本である書A本（恋上以下の残欠本）も、大部分は版本系と同一本文だが、⑩⑪⑫⑬の四箇所が相違する。このなかには、例えば、

⑩ はかなくや玉の緒にせんかた糸のかなたこなたにかくる心を (一〇一五)
の傍点部分が「かくる契を」とあり、第三類系統の第三種、第四種本と一致するものもあるが、これも静本と同様、混態本文ではなく、書A本の祖本の本文を伝えているのである。だから、異文箇所のなかには、版本系の祖本の本文を伝えているものもあるだろう。

第六種本の河本（恋部以下の残欠本）も、版本系と大部分同一本文

である。例外は⑩⑪⑫⑬だが、うち

⑭ 一すちにそれともきかす松かせのひ、き(た)にせぬ滝のしらいと (一一三〇)
の傍点部分が「ひひき絶せぬ」と独自異文になつてている。ただし、⑯⑰は書A本と一致するように、版本系祖本の本文を伝えるものであり、混態本文ではなかろう。

以上、歌本文から第一類系統の伝本に検討を加えてきたが、この分類はほぼ妥当で、版本系として一括してよいことが確認できる。豊本のようない例外もあるが、これは版本系を底本にした異本との混態本文と認定してよい。また、静本・書A本の古写本、それに河本は、三本ともに残欠本だが、これらを互に突き合せることによって、版本系の祖本により近い本文復元が、ある程度可能になるという見通しもできた。

さて、古写の内本と松本を第二類系統本として一括したが、この二本が酷似することは第V表の歌本文でも見事に確認でき、全五十箇所のうち、一致しないのは、わずか⑩⑪⑫の三箇所だけ。それも、⑩は、内本が「春のくれてゆくらん」、松本が「春のくれてゆくらし」、⑪は、内本が「露ふかき」、松本が「露ふかみ」といった一字程度のものである。ただ、

⑫ 露ふかき堅田の興の波間よりくれぬといそくあまのいさり火 (五九五)
の傍点部分が、内本は書C本と同文の「いさり火」であるのに対し、松本は版本と同じ「つり舟」となっている所が、顕著な相違であるだけで、内本と松本の近似性は疑う余地はない。けれども、松本は、第三類系統と思える一本と校異を施しており、異本によつて欠脱歌などを補つていている。内本には異本の記入はないが、詞書など、第三類系統と接触した痕跡もある。しかし、豊本のような歌本文までが混態にはなつていない。また、第二類の二本を、第一類と第三類の各系統本と対比してみると、版本系に一致する本文と第三類系統と一致するもの

も多く、その中間に位置するように思われる。

次に第三類系統本を概観する。

第一種本の東奥本は第三類系統でも特異な位置を占める。五十箇所の異同には版本と一致する本文も少なからず存する。けれども、その大部分は、第三類系統の第六種本や第三種本と同文でもあり（②は、第七、八、九種本と一致）、版本系の独自異文と一致するものではなく、

版本系列の伝本ではない。さらに、第六種本の書C本と対立する異文をみると、多くは第三類系統の第三種本と重なる。また、看過できないのは、例えば、

③ 我にうき人ゆへおつる涙とやせくも心にまかせらん（八六五）

の傍点部分が、東奥本では「これも又うき人ゆへの」とあり、相当大幅な異同が存するが、これと同文なのは、第二類系統の内本・松本だけで、他の諸本にはみえない。同様の例は、③④⑤⑥⑦にも存する。

これは、東奥本が、全体的には、第三類系統に近い本文を有しつつも、一部では第二類系統に近い本文を有することを示唆している。それも恋部以下の中冊に多い。東奥本には異本との校異も所々にあるので、これらは混態によって生じたとも考えられるが、第二類系統の伝本が古い姿を伝えていたことからすると、東奥本もそういった性格を有する伝本なのかもしれない。（②は、「草庵集」諸本中、東奥本のみの独自異文だが、「頓阿法師詠」の本文と一致するので、一項目を特設した（このことは後述）。

第二種本の陽A本も特異な伝本で、独自異文もかなり存するが、歌本文からみると、やはり版本系ではない。例えば、

㉖ 庭にのみちりにし後はおとす木葉や風にまかひきぬらん（六九六）

陽A本では、この傍点部分が版本と同じ「風をさそひ」だが、この本文は、第三類系統の第六種本以外と同文であり、版本系の独自異文と最も重なるものではない。

次に第三種本として一括した、福本・京本・閔本の関連だが、歌本文の異同もほとんど一致し、この三本はやはり一括してよいことが、改めて確認できる。唯一の例外は、⑮で、福本と閔本が「むかしをのこす光とは見る」とある傍点部分が、京本では「うつす」と版本系と同一本文になっているところ。ただ、京本では「うつす」の左側に「のこす」と傍記してある。

この第三種本を第三類系統のうちでみると、第一、二種本に近く、伝本全体からみると、第二類系統に近い本文も有するようである。

次の第四種本の書B本が、歌の出入りや配列の面では、明らかに版本系に属することは、（上）（中）で触れたが、歌本文では全体にわたり版本系ではなく、第三類系統であることが明瞭であり、とりわけ第二、三種本に近い本文を有する。この書B本（またはその祖本）は、底本は第三類系統であるが、版本系と校異し、底本の欠脱歌を補入し、配列も版本に依拠した伝本ということになる。けれども、歌本文は豊本のように混態本文になつていい。

第五種本の都B上本と三手上本の二本は、上・下冊がやや系統を異にする伝本を取り合わせたものと認定して、上冊だけを分離したもの。第V表によつても、二本の上冊の歌本文は同一系統として一括してよい。

例えば、この一本では、

⑯ あし引のとを山島の初尾花ひとりぬる夜の手枕にせん（四六六）

の傍点部分が「山島の尾の」と各々異文が存するが、この異文は、都B上本と三手上本の二本にのみみえるもので、両本の同系統を証拠付ける。（⑯）の「月とみえぬる」も両本のみの独自異文である。ただ、⑩を都A上本でみると、

⑯ 月出るいそ山かけにのくる也あまのいさりにともすかゝり火（五六一）

と他本と校異を施している。三手上本は、かかる校合のあるところは、一方を選択し、「月遅き」と書写したのであろう。実際、(10)(16) (13)はないが)にも都A上本には校異がある。先の(19)と同じ経緯で三手上本のような本文が出現したものと推測される。(その点で、若干ではあるが、三手上本は混態本文を有するといえる)。このように、二本は元来、同系統の本とみなしてよく、第三類系統のなかでは、第六種本よりも、やや第二、三種本に近い本文を有する。

さて、「私家集大成」の底本として採用した書C本を含む第六種本の五本であるが、うち四本は上・下冊が揃っていない残欠本である(もともと、うち三本は、上・下冊をあえて分離したもの)。そのうち架B本は秋下までの残欠本だが、本文は書C本と全く一致する(異文との校異が若干ある)。上冊と分離した都B下本と三手下本は、書C本とは、(37)を除き、ことごとく一致し、この分類の妥当性を示唆しており、やはり上冊とは系統を異にしていたことが再確認される。唯一の例外とした(37)も、書C本では、

(37)たのましと人はいひしタくれのおもひもすてす何。待るらん(九五三)と「を」を補入する指示を行なつてある。「何を待るらん」では表現が奇妙なので、補入前の「何待るらん」として表示したが、ここは「を」を入れ、「る」を消し、都A下本や三手下本のように「何を待らん」のつもりだったのかもしれない。他方、上下に分離した国A下本(冬部以下)も、(24)(36)を除き、書C本と一致。しかも(24)(36)はともに、国A下本自体の独自異文であり、誤写の可能性もある。ただ、国A下本には、異本との校合がかなりあり、第六種本のなかでは、書C本に一番遠い伝本である。

次の第七種本の国A上本も上冊と分離したものだが、冬部が第六種本の国A下本とで重複することは(上)で触れた。その重なつている冬部をみると、(24)(25)(27)(28)(30)の五箇所も一致せず、この事実だけでも、上・下冊が別系統を含綴した伝本であることが察知できる。それは、

冬部以外でもいいことで、やはり第六種本として一括できず、第三類系統のうちでは、第二、三種本に近い本文がある一方、(6)(16)のよう

に版本系に一致する本文も散見される。

次の第八種本の東京本と第九種本の竜門本は、歌の出入り、詞書の異同、配列なども酷似していたが、歌本文でもほとんど一致する。その点、調査未完了の竜門本の「恋下」以下の本文も、東京本から、およその推測が可能である。さらに、第七種本の国A上本も、相対的にこの二本に近似の本文を有する。

最後に「鼈頭草庵集」と称される第四類系統を概観したい。この系統の伝本成立の経緯は、別稿を用意する予定なので、ここでは見通しだけを述べるにとどめる。

第一種本の国B本は、異本との校異を多く有するが、表示に際しては、先述したように原本文の方を採用している。その結果、一箇所を除き、他はすべて承応版本と一致する。唯一の例外である(48)も、第一類の版本系でみると、都A本・書A・河本に同一本文が存するので、国B本の底本は版本系とみなして間違いないからう。そして、国B本のごとき一本との校異のある親本をもとに、適説本文を選択して混態本文を成立させたのが、第一、三種本であろう。第三種本の陽B本・書D本・高本の三本は、異同箇所がすべて一致し、同系統として一括してよい。これに對して第二種本の広島本は、第一、第三種本にある頭注・補注を省略して成立した伝本だが、本文は(3)と(10)を除き、第三種本と一致し、第四類系統と認定してよい。例外の(10)も「いやはかなくも」と「いやはかなにも」といった微妙な異同で、あまり問題にするほどではないが、(3)は少し趣を異にする。国B本で示すと、

(3)偽のあるよにたゞとも故郷のちきりわすれす雁の行らむ(八七)となつてある。この所は第三種本では異本注記を採用せず、「たにも」と並記しているが、広島本は「などか」の方を採用しているといった相違である。第三種本が第一種本にみえる異本校異の方を採用せず、

このように「鼈頭草庵集」の底本が版本系であることは間違いないが、それに校合を施した伝本は、第三類系統で、そのうち特に、第一二三種本が有力かと思う。第四類系統は混態本文の典型的な伝本といえよう。

以上、時折、具体的に和歌を引用しながら、歌本文からみた、各系統分類の妥当性の是非を論じてみた。豊本のように、歌本文の段階にいたり、特異な性格を露呈した伝本も存したが、他は、上冊と下冊に分離して処理したものなどをはじめ、おおむね分類は妥当であることが実証できたといえる。その過程で各系統内での云本の位置にも若干

九
歌本文の異同（そのⅢ）

これまでには、伝本分類の妥当性を、歌本文の觀点から吟味してきたが、次にはこの結果を念頭にして、相互の異文を検討し、伝本の性格を探つてゆきたい。即ち、その異文が初稿本の姿を伝えるものか、あるいは頓阿自身による補訂本文か、後人の手になる補訂あるいは誤写による本文かの判定である。

異文における、こういった判定を明確にくだすことは、特別な依拠資料がなければ、主觀が介入して、はなはだ困難である。けれども頓阿には「頓阿法師詠」という歌稿が現存するので、これを核にして、これまで吟味してきた歌の出入り、詞書や配列の異同をも絡めながら可能なかぎり客観的に判断をくだしてゆきたい。

その際、五十箇所のすべてを検討する紙幅もないのに、「頬阿法師詠」と重複するものを中心に取りあげ、それ以外は比較的大幅な異同箇所だけを対象にするにとどめる。

(未刊国文資料)に、伝自筆本の東京大学国文研究室本（恋部の大部分と離部のすべてを欠脱）や書陵部本（東京大学本の欠脱する後半部の転写本）などが翻刻され、久保田淳氏によつて解説が加えられてゐる。そして、この「法師詠」は、頗阿の二十三歳頃から延文年間のはじめ六十八歳までの作品中、最も自信のある代表作、三六八首を自撰し、「新千載集」の撰歌資料として、延文一年（一三五七）に和歌所へ提出した歌稿と推定されている。「法師詠」の歌稿のこの性格把握は、ほぼ妥当な見解と思われる。

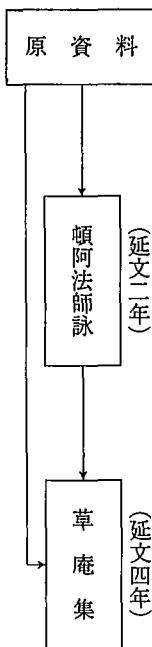
たが、「草庵集」の成立が延文四年（一三五九）秋冬の頃なので、延文二年成立の「法師詠」より後という年時だけに固執し、「草庵集」と「法師詠」とに異文があるとき、「法師詠」の方が初稿本文、「草庵集」は後の補訂本文とは必ずしもいえないことに留意すべきである。このことは以前に論及したこともあるが、一つだけ具体的な事例を示しておく。

撰歌の原資料である「花十首寄書」^(注4)で、頓阿は、
山たかみあまきるさくら咲にけりかすみのうへにふれるしら雪（一五一）
の歌を提出しているが、「法師詠」でこの歌は、
山さくらはやさきぬらしあぐるよのかすみのうへにふれるしらゆき（一五五）

と、上句が大幅に相違する。ところが「草庵集」では、
山(た)かみあまきの桜さきにけり霞のうへにふれるしら雪(一三〇)
と「花十首寄書」の原資料の歌本文に依拠しているといったケースが
ある。逆に、撰歌の原資料である「聖護院五十首(法)」で、
老(お)つひ(ひ)のナ島(しま)はうむこにらよこまなはゆゑ(ゆゑ)のひき(ひき) (四二)

歌は、「法師詠」でも同本文だが、「草庵集」では、あかつきのゆふつけ鳥を、うらみてもねにやはなかぬ衣／＼の空（九九八）と異文が存し、作者自身による補訂の可能性がある。

こういった現象が生じたのは、延文二年に「法師詠」を和歌所に提出の際、原資料の歌本文の若干につき推敲したが、続く延文四年の「草庵集」編纂に際しては、勿論、「二年前の「法師詠」も参照したが、手元に原資料のあるものは、再度、そこから撰歌したこと、その際、若干の補訂を加えることがあつたと考えてよいのではなかろうか。だから、「草庵集」と「法師詠」の歌に異文があるとき、全体的には「法師詠」の歌本文の方が原資料の姿をとどめているケースが多いと思うが、時に逆のケースもありうることに留意する必要がある。この関係を図示すれば、左のようにならうか。



また、東奥本の、
を初瀬や雲も嵐もおしなへて花のいるかにうつるはるかな（一四一）
の歌の右肩には、「山たかみ如此直之出和歌所イ」という異本にあつた注記が傍記されている。この注記は他の諸本にみえないものだが、意味するところは、初句の「を初瀬や」を「山たかみ」と直して和歌所へ提出したということだろう。和歌所へ提出といえば、先の「法師詠」が想起されるが、まさしく、この歌は、
山たかみ雲もあらしもをしなへて花の色かにうつるはるかな（一四〇）
と注記通りの本文となつていて、この注記が頓阿自身のものか、後人のものかは判然としないが、この異文に関しては、原資料では「を初

瀬や」とあつたが、「法師詠」では「山たかみ」と改作し、「草庵集」では、再び原資料のままに収録したケースとなる。その点貴重な注記である。

こういった事例を示すと、「法師詠」には原資料を改作したものが多いと思われがちだが、「草庵集」の伝本相互に、いくつかの異文が存在するとき、そのうちのある異文が「法師詠」と一致すれば、その本文が原本文または初稿本文の姿を伝えている可能性は濃厚といえよう。

ところで、第V表の五十箇所の異文箇所を有する歌と「法師詠」所収歌と重なるものは十九首認められる。そのうち、大成本の底本にした書C本（第三類系統の第六種本）と同一本文を有する歌は十首、それ以外のものは九首ある。まず、「法師詠」の本文と書C本とが一致する本文を有する十首を、大成本の本文で列挙すると、次のようになる。

- ② わかなつむ我ごろも手に風さえて空も雪まのみえぬ野へ哉（二三三）
- ③ 春の夜は月のかづらにさく花も雲とみてや猪かすむらん（一〇八）
- ④ さらてたに月かとまかふ卯花を露もてみかく玉川のさと（二六〇）
- ⑤ とふほたるわか身は影となるまでにゆへもゆるおもひ成らん（三七三）
- ⑥ 藻塙たくけありはつらき海士人の袖にしも猶やると月哉（五五七）
- ⑦ なつみ川霜ははらふあしかものうはけにこほる月の影哉（七一四）
- ⑧ ふる雪や氷をかけてつもるらんみきはそとをきからさきの松（七九七）
- ⑨ たのましと人にはいひし夕くれのおもひもすてす何。待るらん（九五三）
- ⑩ たかゝたに待夜ふけぬとうらむらんきては程なくおき別とも（九九五）
- ⑪ うつせみはむなし（き）からものこりけりき（え）てあとなき朝かほの露（三一九）
- ⑫ 若なつむおきのやけはら風さえて空も雪まのみえぬ比かな

この十首の傍点部分の本文は、すべて「法師詠」のそれと一致する

②は第一類系統では（第二類系統も）、

と二箇所に異文が存するが、「法師詠」では、

わかなつむわか衣手に風さえてそらも雪まのみえぬのへかな（一四）

と大成本と一致する。「野べ」と「比」の異文はともかく、「我ころも手に」と「おきのやけはら」の異文は、誤写や誤認によつて生じたとは思えない。この歌の前後には、第一類、第二類系統と第三類系統との間で、配列異同があり、その関係で「おきのやけはら」を「我ころも手に」に改作した可能性のあることは（中）で詳説したので、ここでは繰り返さない。即ち、版本系などの方が原資料の本文（初稿本文といつてもよい）の姿を伝え、「法師詠」や第三類系統の方は後に改作したケースとの推定である。

⑤は「雲とみえてや」が、第二類系統で「雲とこえてや」、第一類系統の版本系が「空にみえてや」と異文が存する。「雲とこえてや」は意味が不明瞭で誤写によるものか。「空にみえてや」の方は意味は通るが、五句との連鎖が不適切に思える。（）は、「法師詠」や大成本のように「雲とみえてや」が初稿本の本文で、他は誤写、誤認などで生じた本文であろう。

⑪は「月かとまかふ」が、第一類系統と第二類系統、それに、第三類系統の第二種本、「月かとみゆる」が第三類系統の第一、二、三、四種本、「月とみえぬる」が第三類系統の第五種本と、各々異文がある。どの本文でも意味上は大差はないが、「法師詠」との一致からみて、「月かとまかふ」が初稿本の本文で、他は書写階梯で生じた異文ではなからうか。

⑭は「とふほたる」が、第二類系統で、「ほたるとふ」（第三類系統の第七、九種本も）とある異文関係。初句に「とふほたる」とある歌は六首もあるが、「ほたるとふ」は大成本などでは一首のみ。しかも、その一首が、⑭の歌の直前歌である。すると、この異文は、前歌の初句に連動して誤写したケースか。ここは二句以下の歌本文の続き具合

いから判断してみても、「法師詠」のように「とふほたる」が原本文だろう。

⑯の「猶やとる月哉」は、版本系で「など月やどるらん」、第三類系統の第四、七種本で「猶やとる月影」と各々異文がある。ここは、版本系の古写本である静本が、大成本、「法師詠」と同文なので、「猶やとる月哉」が初稿本の可能性が強い。

⑯の「月の影哉」が、版本系では「冬の月かげ」とある。どちらでも情景は変わらないが、同時代の私撰集「続現葉集」でも、この歌は「月のかけかな」と入集しているところからみて、これが原本文とみてよからう。版本系は、歌題が「河上冬月」なので、それにひかれて書写者が改めたのかもしれない。

⑯の「みきはそとをき」が、第二類系統だけ「なきさせとをき」と異文（ただし、竜門本は「みきはにとをき」とある）。ここはおそらく、初稿本で「汀」とあつたのを「渚」と誤讀して生じた異文ではなかろうか。

⑯の「何。待るらん」は、版本系が「なにとまつらん」、第一類及び第三類系統の第一～四種本などは「なにまたるらん」、第六種本のなかに「なにをまつらん」の異文もあり微妙である。この歌は幸い、「聖護院五十首」で「なにまたるらん」と「法師詠」とも一致するので、「なにまたるらん」が原本文だろう。

⑯の「たかかたに」は、第三類系統の第三種本、第四種本だけが「たがために」と異文。ここも、版本系・大成本・「法師詠」のように「たかかたに」が本来の本文だろう。

⑯は「朝かほの露」が第一類系統の第五種本、第六種本、それに第二類系統、第三類系統の第八種本で「朝かほの花」と異文がある。どちらでも意味上は不都合はないが、同時代の勅撰集「新拾遺集」、および「法師詠」でも「朝かほの露」なので、この方が原本文とみてよ

かろう。

以上、十箇所にわたって検討を加えてみたが、なかには判定の困難なもの、臆測の域をでていないものもあつた。ただ、「聖護院五十首」「続現葉集」「新拾遺集」などの原資料や同時代の撰集に重出するものがあり、判断を証拠だてることが出来た。

第三類系統の第六種本（書C本）の本文と「法師詠」とが一致しない異文歌は次の九首である。大成の歌本文で列挙する。

- ① あらたまの春たつけふの朝日影にはへる山や霞なるらん（二）
- ⑥ 明やすき空ともみえす春の月かす（みをわたる影そのとき）（一〇九）
- ⑦ くれぬとて立帰れとも山さくら花にこゝろはとまりぬるかな（一五三）
- ⑬ をくら山ともしのまつをおのれさへみね立ならし鹿や鳴らん（三五三）
- ⑯ 荻の上の露となりてや雲ふとふ雁の涙も色にいつらん（五〇四）
- ㉒ はれくもるさとこそかはれ神無月空は時雨のたえぬかる哉（六六六）
- ㉔ 紅葉の雨とふるともまさりけりせかれて出る山川の水（六九一）
- ㉘ 霜さえて千鳥なくなりみよしの、きよきなけれの明かたの空（七四一）
- ㉚ いきて世におなしつらさをなけ、とやわすれては又思ひ出らん（一〇七〇）

①の「山や霞なるらん」は、版本系では「山は霞なりけり」と異文。

ところが「法師詠」は「山はかすみそめづ」と「草庵集」の諸伝本にない本文を有する。この歌は、「聖護院五十首」からの入集なので、原本文がたどれるが、「山は霞初つ」と「法師詠」と一致する。従つて「草庵集」の本文は、どの伝本も原本文ではないが、初稿本の本文がいづれであつたかも判然としない。

⑥の「空ともみえす」は、第一類、第二類系統、それに第三類系統の第七、八、九種本では、いずれも「夜半ともみえす」と異文が存する。どちらでも意味上の不都合はないが、「法師詠」に「よはともみえず」とあるので、この方が初稿本文かと思われる。

⑦の「山さくら」は、第一類系統はすべて「山さとの」となつてい

るが、他の諸本は「山さくら」。こゝも「法師詠」は「山さとの」と第一類系統と重なる。「山さくら」でも意味は通するが、その下に「花にこゝろは」と重複して難がある。やはり「山さとの」が原本文で、「山さくら」は後人の誤認によるものではなかろうか。

⑬の「鹿や鳴らん」と一致する伝本は、第一類系統の版本と第三類系統の第六種本だけで、他の諸本は「鹿やまつらん」とある。「法師詠」は、

をくら山ともしのさつおをのれさへみねたちならしかやまつらむ（九七）
とあり、一箇所に異文がある（但し、「法師詠」でも樋口本では「さつを」が「松を」となつてゐる）。この本文は「法師詠」が原本文であつて、「さつを」を「まつを」（「さ」と「ま」の変体仮名は近似）と誤写し、意味が通じがたいので「鹿や鳴くらん」としたのではない。因みに「鹿やまつらん」の本文を有する伝本には、静本のようになに「法師詠」と同本文のものもある。この異文は、本歌の、
をぐら山みねたちならしなくしかのにけむ秋をしる人ぞなき（古今集物名貴之四三九）
に対応した本歌取の手法からみて「さつを」「鹿やまつらん」が妥当であろう。

㉗の「色にいつらん」（大成本は「かはる」と傍記あり）は、第一類系統が「色かはるらん」と異文。どちらでも意味は通するが、「法師詠」も「色かはるらん」と版本系と一致。「新拾遺集」（秋上・三七四）でも「色かはるらむ」とあるので、これが原本文と思われる。

㉙の「だえぬかる哉」は、第一類系統はすべて「ふらぬ日もなし」と異文。どちらでも情景は同じだが、「法師詠」も「ふらぬまもなし」と第一類系統に近い本文。ここも「ふらぬ日もなし」が初稿本文に近く、「たえぬかる哉」は後の改作であろうか。

㉛の「せかれで出る」の本文は、第三類系統の第六種本だけで、他の諸本はすべて「せかれでよとむ」。この歌は本歌の、

立ちどまり見てをわらむもみぢばは雨とるとも水はまさらじ（古今集・秋下・鶴恒・三〇五）

の発想を逆手にとつて、紅葉にせかれて水が増ると詠じたもので、その点、「せかれて出る」では意図が不可解である。「法師詠」および原資料の「聖護院五十首」でも「せかれてよとむ」なので、この本文が元来のものである。

㉙の「きよきなかれの」は、㉛と同様、第三類系統の第六種本以外は、「きよきかはらの」とあり、「法師詠」も同文である。ここは本歌の、

なばたま夜の更けゆけば久木生る清き川原に千鳥しば鳴く（万葉集卷六・九二五）⁽¹⁶⁾
から判断しても、「きよきかはらの」が初稿本文とみてよからう。

㉛の「わすれては又」が、諸本中、東奥本のみ「わすれはてはて」と異文が存する。どちらでも意味は通する。独自異文なのに第V表に加えたのは、「法師詠」が「わすれはて、は」となつてゐるためである。が、この事実をもつて、「草庵集」の初稿本の本文が「わすれはて、は」であつたと判定はできない。この本文を有するのが、東奥本のみであり、この伝本は、先述の注記でも窺えるように「法師詠」を視野に入れているからである。

以上、大成本（書C本）と「法師詠」とが一致しない本文に検討を加えてきたが、ここでも、「聖護院五十首」「法師詠」あるいは本歌などから、原本文や初稿本文がある程度確認できた。

最後に、比較的大きな異文を数例とりあげて吟味しておく。

④ こしの海のかすむ波まに帰(る)なり水に数かくかりの一つら（九八）
傍点部分の「こしの海の」は、第一類・第二類系統では「志賀の浦の」となつており、第三類系統と対立する重要な異文の一つである。この異文は誤写などで生じたものではなかろう。この歌のあたりは、第一、二類系統と第三類系統の間に配列異同があり、その移動のために、「志賀の浦の」から「こしの海」へ改作された可能性のあること

は、（中）で詳説したので、ここでは割愛する。

⑯ 我かとてとふもなし故郷の浅茅か原の松むしのこゑ（四八〇）

この歌の傍点部分が「故郷の浅茅か庭の」（第一類、第三類の第七・八・九種本など）と「浅茅原跡なき庭の」（第二類・第三類の第一・二・三・四種本など）の三つに分れるが、大雑把にみれば二つとなる。これも誤写によつて生じた異文ではなかろう。情況設定に変化はないが、どちらが初稿本文か判然としない。

㉚ うつもれぬ波もひとつに白妙のふちにのこらぬ雪の明ぼの（七九一）
この歌の傍点部分のような本文を有するのは、第三類系統の第六種本だけで、他の諸本はすべて「藤江のうらの」となつていて。「ふちにのこらぬ」では、いまひとつ意味や情景がすつきり理解できない。こ

は「白榜の藤江の浦に漁する海人とや見らむ旅行くわれを」（万葉集・卷十五）の例歌もあるように、「藤江のうらの」が初稿本文であったと推測する。

㉛ 我にうき人ゆへおつる涙とやせくも心にまかせらるん（八六五）

これは先述したように、第二類、第三類系統の第一種本だけが、傍点部分が「これもまたうき人ゆへの」と異文が存する。意味はどちらでも通するが、単純な誤写で生じた異文ではなかろう。「これもまたうき人ゆへの」が初稿本文で、この意味を明解にするために「我にうき人ゆへおつる」に改作したようにも思われるが、確証がなく不明とせざるをえない。

㉕ 諸本の歌本文で、異文が一番多岐に分れるのは、次の贈答歌である。詞書も引用する。

新千載集えらはれ侍し時、いたし侍し歌を、彈正宮より御覽すべしよしおほせこと侍し程にまいらせたりしを、返し給し時つ、みかみに
みかみけりこの玉のみそわかの浦のむかしをかへすひかりとはみる（一一三三三）

御返事

老の浪たちかさねぬるわかの浦のもくつはいと、玉もましらす（一一三四）
これは、頓阿の歌稿を閲覧された彈正宮邦省が、その和歌の秀抜さを
讃美した歌をよこされたのに対し、頓阿が謙辞の意を込めた歌を返し
た贈答歌である。諸本をみると、(45)の邦省親王の傍点部分に次のように
な異文が存する（下句全体を引用する）。

(イ) むかしをかへすひかりとはみる（第三類の第六種本）

(ロ) むかしをうつすひかりとはみる（第一類の第一・二・六種本など）

(ハ) むかしうつすひかりなりける（第三類の第二種本など）

(イ) むかしをのこすひかりとはみる（第三類の第三・四種本など）

(ロ) むかしをうつすかみなりける（第二類・第三類の第一種本など）

一見、かなり多岐に分れた異文が存するようであるが、(45)の歌は邦省
親王の歌であり、その点、頓阿が改作するのも妙な行為であり、書写
階梯で誤写、誤認によって生じたものであろう。異文の生じたポイントは、「かへす」「うつす」「のこす」にあるが、「す」は共通するので、
あとは草体の「かへり」を「かへ」「うつ」「のこ」と三様に読みとつ
たのである。事実、伝本のなかには、どちらでも解読できる草体の
ものもあり、互に近似して誤読されやすい。次の「ひかり」は、(イ)か
ら(ロ)に共通するが、(ホ)の「かがみ」（鏡）が特異である。これは恐らく、「うつす」ものとして「かがみ」を持ち込んだもので、一首の意味からみて、玉が昔を写す鏡とするのは奇妙である。「玉」と「ひか
り」は縁語で、頓阿の珠玉の和歌だけが、昔の正雅な歌風を今に伝え
ている意だから、「むかしをかへす」「むかしをのこす」でも意味は通
ずるが、ここは、「むかしをうつす」で、(ロ)(ハ)あたりが原本文であつ
たかと思うが、臆測の域をでない。

以上の五箇所は「法師詠」にはみえないが、比較的大きな異文な
ので、特に検討を行なった。他にも触れない異文もあるが、煩瑣にな

るので割愛する。

ここで「法師詠」の歌と重なる十九首とこの五首、あわせて二十四首の異文を、各系統本に当り、原本文（または初稿本文）か否かを表
示し、伝本のおよその傾向を探つてみたい。

取り扱つたのは、たかだか五十箇所、検討したのはその半分程度で
あるため、この表示が、各系統の本文の性格を決定付けるものではな
いが、性格の一端はみてとれよう。

原資料や同時代の撰集などによつて、原本文（または初稿本文）が
確認できるものは、◎、本歌や意味上、あるいは「法師詠」との一致
などから、原本文（または初稿本文）と推測されるものは、○、作者
の改作と推測されるものは、□、原本文（または初稿本文）か改作か
判定のできないものは、△、作者の改作か書写の際の誤認かどうか判
定しかねるものは、▽、書写階梯で生じた誤写、誤認によると思える
ものは、×とし、各系統の代表伝本を選択し、一覽表を作成したのが
第VI表である（第四類系統は混態本文なので省略）（次頁参照）。

第VII表でみると、◎や○の多い方が原本文（または初稿本文）を伝
えている伝本となるが、各伝本とも極端なたよりを示し
てはいない（もつとも「法師詠」は、当然のことながら、五首の該當
歌がないにもかかわらず、◎と○が十七と抜群に多い）。

◎と○の合計の一一番多いのは、版本の十五箇所、少ないのは、書
本の九箇所、他の伝本はその中間に位置する。配列や詞書の異同のと
ころで、版本系が思いのほか、初稿本の姿をとどめていると述べたが、
この歌本文でも、そういつた傾向の一端が浮上している。特に、版本
系の静本は、上冊だけなのに、◎や○が九箇所もあり注意される。こ
れに対し第二類系統は、初稿本文を伝えながら、その一方で誤写もあ
り、第三類系統も、②④などにみてとれるように編者の改作が行われ
た可能性のある伝本である。これは詞書や配列異同の検討結果とも一
致する。

しかし、歌本文に関する限り、原本本文や初稿本文と思えるもの、改作と思えるもの、誤写と思えるものなどが、各伝本に散在し、文句なく善本といえるものは見出しがたい。

十 各系統本の性格

ここで、これまで吟味してきた歌の出入り、詞書・配列・歌本文などの異同結果を総合して、各系統本の性格を大雑把にまとめておく。

第一類系統は版本系とみなしてよい。配列や詞書表記などからみて、諸本の中では、比較的初稿本の形態を伝えていたが、歌本文の面でも、その一端が窺えた。けれども、必ずしも善本とはいえず、三首ほど共通した脱落歌があるほか、詞書や配列の不備などころもあった。そのなかで、第一種本は、承応版本と同一であり、第二種本（架A本）も異本と接触したもようだが、基本的には版本と同じとみてよい。第一類系統で特異なのは、第三種本（豊本）で、歌の出入り、配列・詞書の異同では、版本とほぼ一致するが、歌本文は、他系統との接触により混態本文になつてている。第四種本の静本は、現存諸本中の最古写本で、さすがに本文も優秀だが、春・夏・秋だけの残欠本、三首の欠脱歌と九首を含む落丁のあるのが惜しまれる。第五種本（書A本）も古写本で、本文は優秀だが、これまた恋部以下の残欠本、それに二首の脱落がある。第六種本の河本は書写は古くないが、脱落歌も一首存するだけで版本系の祖本の面影を伝えるが、恋部以下の残欠本。第四・五・六種本のうち、どれか一本でも冬部を具备していたら、これらの残欠本を重ねることによって、ある程度、版本系の祖本に近い伝本の本文復元も可能であつたろう。

第二類系統の内本・松本は、第一類の版本系に近い面と第三類系統の第一、二、三種本に近い面を有する。内本は室町期（享禄元年）の古写本で、さすがに初稿本の形態を伝えている箇所も多いが、十一首

の脱落歌に加え、落丁などで、さらに三十七首もの欠脱があるのは、大きな欠陥である。しかも、本文にはまま誤写もあり、詞書は第三類系統と接触している。松本にも二十首ばかりの脱落歌があるし、異本と接触している。但し、内本と松本の両本を重ねることで、第二類系統の祖本をある程度まで復元可能であろう。

第三類系統の特色は、詞書の追補・整備が行われており、配列も若干整備されているなど、再稿本の姿を伝える面を有する。けれどもこの整備は主として春部上に限定される。

第三類系統のうち、第一種本の東奥本は、三首ほどの欠脱歌があるが、大きな欠陥はない。たゞ、版本系が第一類系統と接触した形跡もあり、本文には第二類系統に近いものもままみえる。第二種本（陽A本）も、書写もかなり古く、丁寧な書写を行なっているが、七首ほどの脱落歌があり、かつ、編者の意図とは思えない配列異同がかなりあり、歌本文にも独自異文も少くない。第三種本の三本は、第二類系統と接触した可能性もある。歌本文も初稿本文を伝えていたと思われる箇所もあるが、京本には恋部に錯簡があり、関本も付箋歌が多く、三本間にも、十首ばかりの共通の脱落歌があるのは欠陥である。第四種本の書B本は、諸本にみえる歌をすべて有し、一首の脱落歌もない珍しい伝本である。けれども配列は明らかに版本系であるのに、歌本文は第三類系統という齟齬をきたしている。これは、二本以上の伝本と校合し、脱落歌を追補して形成された混態の伝本であることを示唆している。ただ、歌本文は、豊本のように混態本文になつていないのである。第五種本の二本は共に上冊だけだが（下冊は、共に第六種本に分離）、配列や詞書などからみて明らかに第三類系統。二本間には、上冊だけでも六首の共通の脱落歌がある。第六種本には、あわせて五本が所属するが、完本は書C本だけである。版本に比べて六首の歌がみえない。この六首がすべて、いわゆる脱落歌かどうかは疑問。詞書・

配列などは一番よく整備されており、完本の書C本は『私家集大成中世III』の底本にしたように、大きな欠陥がない。が、歌本文には誤写による異文と思えるものがある。第七種本も第六種本の国A上本の下冊にあたる残欠本。第二類系統との接觸も考えられる。第八種本の東京本は完本で書写も古いが、細字補入歌のほか、三十余首もの脱落歌があるのが惜しまれる。第九種本の竜門本は、歌本文など、明らかに第八種本に近い（校合未了の恋部以下も、ある程度予測できる）。が、この伝本にも十余首の脱落歌がある。

第四類系統は、いわゆる「鼈頭草庵集」系統である。版本系の本文を底本とし、第三類系統の一本と校異を行ない、その校合本文を適宜選択して成立した、まさしく混態本文である。そのうち、第一種本（國B本）が、その草稿本の面影を忠実に伝え、第二種本は「鼈頭草庵集」の部分を省略したもの。第三種本が、整備された、いわゆる「鼈頭草庵集」の伝本である。

このように「草庵集」の伝本には、初稿、再稿、補訂などの姿の一端を伝えるとおぼしきものがある一方、書写過程で、それらの伝本が互に接觸したこともあるって、かなり複雑な状況を呈している。そして、編者頗阿の手になる初稿本、あるいは再稿本を忠実に伝えた、いわゆる最善本といったものは、今のところ存在しない。歌の出入り、詞書・配列・歌本文の各異同など、全体にわたつて、各系統の有力伝本と比較し、より優れた本文を復元してゆかなければならぬ状況にあるといつてよい。

各系統から有力な伝本を抜擢すると、第一類系統、いわゆる版本系では、承本を中心とし、それに古写本の静本・書A本、加えて河本の三本を突き合わせて版本系を復元すること、第二類系統では内本に依拠し、欠脱部分は松本で補充して復元すること、第三類系統では、第一種本の東奥本、第二種本の陽A本、第三種本から福本、第六種本で

は書C本、それに第八種本の東京本（欠脱部分は龍門本で補充）などを、各々比較してみる必要がある。少なくとも、これだけの伝本校合と手続きをとれば、頓阿の企図した「草庵集」という私家集の、配列・詞書・歌本文をある程度復元可能となるであろう。第三類系統の第四種本や第四類系統を参照することも意義はあるが、その際は混態の伝本ということを考慮に入れる必要がある。それを念頭にしないと、かえつて混乱するであろう。

最後に、現在所在の知られる伝本で、精査できないものの、ある程度系統の推定できる伊地知鉄男氏蔵本（伊本と略称）と、「草庵集」を若干編纂しかえた多和文庫本とを簡単に概説しておく。

伊本は『和歌文学大辞典』に巻頭部分の写真一枚が掲載されていることや、この伝本を直接調査された井上宗雄氏が『中世歌壇史の研究南北朝期』で若干の紹介をされ、私信もいただいたことから、系統を推定してみる。

伊本は巻六までの残欠本で、室町期の古写本との由。第I表の歌の出入りでは、版本が脱落している「ほのかなるた、一声も」（一九五）の歌が存するので、版本系ではない。また、第II表の詞書の異同では、

①「二条入道大納言家十首」があり、②の表記は「等持院贈左大臣家」、③の「法印淨弁許にて題をさくりて歌よみ侍しに」があり、④の「寂真よませ侍し哥に」が見えないことから判断すると、第一類、第二類系統ではなく、第三類系統とみなしてよい。さらに第IV表の配列異同では、①④⑤⑩⑪⑯が（甲）の配列とのことなので、これらを総合すると、第三類系統のうち、第一、五、六、七、八、九種本のいずれかに所属する伝本と認定できる。

一方、多和文庫本「草庵集」は、江戸中期頃の袋綴写本一冊だが、この伝本は、後人が少し編纂しかえているので、これまでの伝本と同

一次元で処理できなかつた。伝本の系統は、巻末に「近衛殿御書」や「年経ぬる」の歌が存するので、版本系である。但し、第三類系統とおぼしき異本と校異を加えている。

この伝本が特異なのは、ある歌の詞書が、例えば「等持院贈左大臣六首歌に」（八）のように詠歌事情だけで、いわゆる歌題のないものは、歌の前に詞書をそのまま記している。これは普通の伝本の書き形式と変わりはない。ところが、「初春」（四）とか「山霞」（五）のように、歌題のある歌は、その歌題を歌頭に書写し、さらに詞書がある歌は、「日野大納言家三首歌に、早春霞」（九）のように、詠歌事情と歌題の歌題だけを歌頭に記している。原則的にこういった方針で書写しているので、いわゆる詠歌事情を指示した詞書が省略されている歌が多数ある。この書写、編纂態度は、「草庵集」を私家集のものとして享受するよりも、歌題中心の歌集として読み込む姿勢を示しているのではなかろうか。かかる方向を押し進めると、江戸時代に版行された広く流布した「類題草庵和歌集」の形態にならう。多和文庫本は、その意味で、「草庵集」の享受という面からみて興味深い伝本といえよう。

「草庵集」の伝本は、以上紹介した以外にも、個人蔵のもの、寺院蔵のものの存在を数本知っているが、閲覧の機会が得られないでの、ここで列挙することは避けたい。

これで、（上）（中）（下）にわたった「草庵和歌集」の伝本の考察を一応終える。御覽のように、いまだ完全な伝本考となつてなく、伝本派生経路など、追跡すべき問題も少なからず残つている。

叙述をあまりに詳記したことに対し聾闇を買うかもしれない。歌の番号や異文の本文部分だけで指示すれば、もっと短くまとめられるこ

とは重々承知している。けれども、あえてこういつた記述態度を堅持したのは、説明を具象的で明解にしたかったこともあるが、なによりも、研究者の利用の便益を考慮したためである。現在、私の手元に完全な校本が完成しているわけではなく、また、たとえ完成しても、研究者の少ない分野での出版は容易に行なえない。そういうた宿命をもつ分野における伝本研究は、紙面の許す限り、研究者が少しでも利用できるように詳細に記述しておくべきだというのが、私の一貫した信念である。その点をも考慮し御寛恕いただきたい。

注1 「草庵和歌集」の本文は「私家集大成 中世田」により、多少校訂をしたもの

で示す。番号も大成本のもの。

- 2 この本文は架A本のもの。
- 3 摂稿「草庵集」の撰歌資料考(二)——「花十首寄書」と「建武二年内裏千首」——(岡山大学教育学部研究集録、第五十二号)。
- 4 「頼阿法師詠と研究」(未刊国文資料)に、書陵部本が翻刻されている
- 5 碧沖洞叢書第五十一輯「未刊和歌資料集第一冊」に翻刻されている。
- 7 「万葉集」の本文と番号は、日本古典文学大系本による。

〔付記〕

「草庵和歌集」の伝本を少しずつ調査はじめてから、もうかれこれ、十七、八年になる。途中「草根和歌集」などの研究に重点が移向したこともあるたどはいえ、この程度のものをまとめるにしては、あまりの遅延さに長嘆息している。その間、伝本調査に際しては、公私図書館や文庫の方々に大へんお世話になつた。特に、川瀬一馬、名和修、福田秀一、井上宗雄の各氏には、伝本閲覧の便宜や教示を受けた。共に深謝申しあげたい。

(昭和60年7月15日受理)